**明治時代（1868-1912）の松本城**

1868年の明治維新後、新政府は西洋式の装備と戦術を中心とした近代的な軍隊を設立した。木造の城郭は時代遅れとされ、多くの城が取り壊された。

松本城は、市川量造（1844-1908）という政治家の尽力により、その運命を免れることができた。市川は、松本城の取り壊しを延期し、城内で展覧会を開催することを政府に願い出た。市川の願いは認められ、大天守を中心に5回の博覧会が開かれた。その後、大天守は輸入農法の実験場となり、1899年には地元の中学校の運動場となった。

一方、大天守をはじめとする建造物は老朽化が進んでいた。中学校長の小林有也（1855-1914）は、この城を後世に残すことが重要であると考えた。そして、1901年に「松本天守閣保存会」を発足させた。1903年（明治36年）には、この会を中心に改修工事が開始された。日露戦争（1904〜1905年）で工事は中断されたが、1913年にようやく完成した。驚くべきことに、改修費の8割は会員からの寄付でまかなわれた。

修理のほとんどは、城がこれ以上老朽化しないようにするために行われた。ゆがんだ柱をまっすぐに伸ばし、金属製のボルトで補強し、割れた屋根瓦を取り替え、外壁と内壁に漆喰を塗り重ねた。これらの城の構造的な問題は、1950年代に天守閣を完全に解体し、再び組み立てることで解決された。